

<論文>

## 保育・教育現場における行事活動の意義

青戸 泰子\*<sup>i○</sup> 菊地 愛未\*<sup>ii</sup> 田邊 資章\*<sup>iii</sup>

### Significance of activities in events at nursery schools and other school educational sites

Yasuko AOTO\*<sup>i○</sup> Manami KIKUCHI\*<sup>ii</sup> Yoshiaki TANABE\*<sup>iii</sup>

To examine the significance of activities in events at nursery schools and other school educational sites, we develop a scale to measure significance of activities in events.

As a result, three factors have been extracted. We named the first factor “power of self-expression and interpersonal skills”, the second factor “traditional culture”, and the third factor “learning in a group environment”.

**Key words** : nursery schools, kindergartens, events, significance of activities

(幼稚園, 保育園, 行事の意義)

#### 1. 問題

保育・教育現場では、年間の保育・教育計画の中に様々な行事が取り入れられている。奥山(1997)<sup>1)</sup>は、「幼児の情操を養い、保育の変化と潤いをあたえ、郷土的な気分を作る上から、年中行事はできるだけ取り入れられることが必要である」と述べている。

文部科学省の幼稚園教育要領(2008)<sup>2)</sup>では、幼児期における教育は、生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育の基本は環境を通して行なわれるものであるとしている。また、内閣府が発表した幼保型連携認定こども園教育要領(2014)<sup>3)</sup>によると、「乳幼児期における教育及び保育は、子どもの健全な心身の発達を図りつつ生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要な

- 
- \* i 関東学院大学教育学部；〒236-8503 横浜市金沢区六浦東1-50-1  
Kanto Gakuin University; 1-50-1, Mutsuurahigashi, Kanazawa-ku, Yokohama 236-8503, Japan
  - \* ii 善行乳児保育園善；〒251-0871 藤沢市善行2丁目18番地の5  
Zengyonyuji Nursery school; Zengyo, Fujisawa, 2-18-5, Japan
  - \* iii 東京未来大学；〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12  
Tokyo Mirai University; 34-12, Senjuakebono-cho, Adachi-ku, Tokyo 120-0023, Japan

ものであり、家庭や地域での生活を含めた園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならない」と示めされている。さらに厚生労働省は保育所保育指針(2008)<sup>4)</sup>の中で、「保育所の生活における子どもの発達過程を見直し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的な狙い及び内容を設定すること」と提唱している。

これらの指針や要領に示されているように、乳幼児期の経験は子どもの成長・発達にとって非常に大切な機会である。その中でも日常保育の補完として、周囲の状況・環境への理解を促す行事活動を実施することは意義のあることと考えられる。

また、「保育現場において、行事とは年中の流れを確認する大切な節目となっており、子ども達は行事に参加・体験することで、日本のもつ四季を感じる事が出来る」と秀(2010)<sup>5)</sup>は述べている。さらに、年中行事を保育に取り入れる価値について、恒岡・中田・西田(2016)<sup>6)</sup>は、「年中行事を取り入れる価値について一定の評価が出来るとしても、行事にみられる種々の行為を体験させることだけにとどまってはいけない。大切なことは、幼児期の子どもに心に快い記憶としてどのように残していくことがよいのかという点を考えることである。年中行事でみられる個々の行為には、見方によって科学的とは言えない要素も含まれている。例えば、節分行事では豆をまいて鬼を追い払うことや豆を歳の数だけ食べることで、七夕行事では短冊に願いごとを書く行為などが挙げられる。保育者は、こうした行為に対して科学的であるかどうかだけで判断するのではなく、昔から人々のささやかな願いが込められていたハレの日の特別

なふるまいとして理解した上で、子どもたちにどのように話をしていくかについて考えていくことが大切である」と述べている。

このように、幼児教育では子どもの身体的発達だけに目を向けるのではなく、知識として日本や多くの地域の文化に触れる経験を積み重ねることも重要であろう。

そして、年中行事の実施については漫然と数こなすのではなく、その行事実施の意義を理解することが大切でもある。

一方で、「行事中心保育」が指摘されることになったことについて、足立(2014)<sup>7)</sup>は、「行事の実施にあたっては、日々の流れに配慮すること、子どもの主体的な活動であること、教育的価値を十分に検討すること、幼児の負担にならないこと、など十分な配慮の下で精選すること」を求めている。

現在、保育園・幼稚園で行われる行事は、①伝統的な行事(子どもの日や七夕など)、②成長の節目(入・卒園式・誕生会など)、③保育のまとめとして行うもの(運動会・生活発表会など)、④日常と違った環境での行事(遠足・お泊り保育など)、⑤保健・安全を目的とした行事(身体測定・避難訓練など)などがある。それらの行事を行う上では、保育者には配慮すべきことも多くある。また、子どもに対しても様々な経験の機会となるよう環境を整えることが求められる。

しかし、園行事実施における課題について奥山(1997)は、「多くの行事が次々に実施され、行事の実施だけで保育時間のほとんどが費やされたり、慣習によってそれまで実施されてきた行事を踏襲してしまうために行事の実施自体が保育の目的になってしまったりするなど行事に関しては課題も

多い」と警鐘を鳴らしている。この指摘のように、行事のための保育にならぬよう心がけなければならない。行事はあくまでも日常の保育の延長であり、子どもの成長・発達を主眼とした活動にすることが必要である。

つまり、保育・教育者は保育現場の中で行われている行事活動をただ漫然と踏襲、実施するのではなく、「行事がどのような意味を持っているのか、子どもにとって具体的にどのような経験となっているのか、行事の意義をどのように捉えそれを実施するか」をあらためて踏まえることが求められている。

## 2. 目的

本研究は、保育・教育者が保育・教育現場において行事活動の意義をどのように捉え実施しているのかについて考察することを目的とする。

## 3. 方法

3.1 保育・教育現場における行事活動に関する先行研究を検討する。

3.2 保育・教育現場における「行事の意義尺度」の作成および保育・教育者を対象としたアンケート結果(自由記述回答)を通して検討する。

### 3.1 先行研究

#### 「行事」について

秀(2010)は、「行事は保育の高まりとして、日常生活の延長線上に捉え、定められた日時に、特定の目標をもって行うものとしている。行事には、園行事・伝承行事・社会行事・宗教行事などがあり、行事の内容は、ねらいに基づき必要とするこ

とを取捨選択して成り立っている。行事を行う意味には、子どもの成長の節目を確認する、回を重ねることによって季節を感じ、時の経過を知る、入園してはじめて経験した行事に参加した喜びや感動が、次年度への期待・予測・工夫などを生み出すもとなっていく」と提唱している。

また、奥山(1997)によると、「行事とは本来、幼児の生活の節目となり、それまでの生活経験をもとに幼児と保育者とが共に活動を作り上げる喜びや期待感、日常の活動とは異なる活動の工夫などを経験したり、季節感や伝承文化など、行事ではなくてはできない体験をしたりすることができる機会である」と述べている。

日本における年中行事は、あらゆる時期にあらゆる土地で行われている。それは、それぞれの土地ごとの社会組織や信仰のありよう、生産のリズムなどを反映して成立し、保持されているものであり、社会・人事・信仰上の節目として、大きな意義を持つとされている。子どもたちにとっても特別な日とされ、晴れ着を着て、特別な食事をすることで日常を払拭し、次の行事まで黙々と過ごす日々の支えであったと言える。

#### 保育・教育現場における行事の持つねらい

幼稚園教育要領(2008)では、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」としている。幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行なうものであることを幼稚園教育の基本とするとしている。

そして幼保型連携認定こども園教育保育要領(2014)では、「乳幼児期における教育及び保育は、

子どもの健全な心身の発達を図りつつ生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要なものであり、家庭や地域での生活を含めた園児の生活全体が豊かなものとなるように努める」とその必要性を説いている。

さらに、保育所保育指針(2008)において、「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行なわなければならない」と示している。またこの指針の中で、「子どもが保育所において、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、保育士などが行わなければならない事項及び子どもが身に付けることが望まれる心情、意欲、態度などの事項」を示している。また、子どもの生活やその状況に応じて保育士などが適切に行う事項と、保育士などが援助して子どもが環境に関わって経験する事項の2点を示している。

保育士などが、ねらいおよび内容を具体的に把握するための視点として、「養護に関わるねらい及び内容」と「教育に関わるねらい及び内容」との両面から示しているが、実際の保育現場においては、養護と教育が一体となって展開されることに留意することが必要とされている。ここでいう「養護」とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士などが行う援助や関わりである。そして「教育」とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開させるための発達の援助である。

「健康」・「人間関係」・「環境」・「言葉」・「表現」

の5領域ならびに、「生命の保持」・「情緒の安定」に関わる保育の内容は、子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるものである。

以上の3つの要領・指針に示されているように、保育・教育現場において、子どもの人間形成の基礎を培い、園児の生活全体が豊かなものとなるものの保育方法の1つとして、行事活動が行われているのである。

奥山(1997)は、幼児の発表に関して保護者が参加する行事のねらいとして次の2点を設定した。「第一に、幼児が遊びの楽しさを味わいながら、保護者・保育者・幼児同士の触れ合いを楽しむこと、第二に、保育者と保護者が協力して行事を開催し、行事を通して互いの機能分担について理解しあい、園と家族との一層の連携を深めること」と提唱している。

足立(2014)は、保育における行事の意義と役割を、「①子どもの生活を豊かにする、②環境とのふれあいを広げる、③機会教育になる、④集団の形式に意義がある」とし、このようなねらいのもと、「園の保育活動の中の行事は大きな比重を占めるようになり、重要な教育方法と手段として日常の保育と密接に結びつき、教育目標の達成に大きな役割を果たしているという行事中心保育が指摘されるようになった」と述べている。

#### 年中行事を保育に取り入れる価値について

恒岡ら(2016)は、年中行事を保育に取り入れる価値を次の7点にまとめた。

「①次世代に受け継がれるべき我が国の民俗文化として、年中行事は大切にしていける価値がある

こと、②年中行事には季節を意識した食べ物や遊びが関係している場合が多く、幼児期の文化体験としての総合的な価値を見いだすことができること、③年中行事に対して、子どもなりに期待感をもつことが心の成長にとって有意義であること、④幼児期の年中行事体験は、大人になってからも快い記憶として残っていること、⑤年中行事には家庭生活と子どもの育ちの関係を見つめ直すきっかけが含まれること、⑥家庭生活の中では十分にできない年中行事体験を幼稚園・こども園・保育所が補完できること、⑦年中行事は幼稚園・こども園・保育所と家庭・地域とのつながりをつくる機会となっていること」としている。

このように年中行事を保育に取り入れる価値について一定の評価が出来る。しかし、年中行事でみられる個々の行為には、見方によって科学的とは言えない要素も含まれている。恒岡ら(2016)によると、「例えば、節分行事では豆をまいて鬼を追い払うことや豆を歳の数だけ食べること、七夕行事では短冊に願いごとを書く行為などが挙げられる。保育者は、こうした行為に対して科学的であるかどうかだけで判断するのではなく、昔から人々のささやかな願いが込められていたハレの日の特別なふるまいとして理解した上で、子どもたちにどのように話をしていくかについて考えていくことが大切である。また、保育者としての資質向上の観点からは、将来保育者となって自らの年中行事体験を生かした保育を実践することによって、年中行事の持っている文化的価値を再認識でき、我が国の文化や伝統の継承に寄与していることの認識化にもつながる」と示唆している。

幼児教育現場において、年中行事は大変重要な

位置づけとされている。年間を通して、子ども達が触れる行事は多種多様であり、その数に限りはない。行事はそれを体験する子ども達にとっても大きな存在であり、欠かすことのできないものであることがわかる。

富田(2015)<sup>8)</sup>によると、「大人の多くはサンタクロースやクリスマス行事の積極的な意味を認め、肯定的な態度を示し、子どもの体験がより豊かになるように支援していること」と述べている。そして、「園でクリスマス行事そのものを行うことに関しては、リスク要因として子どもの夢を壊す可能性や恐怖誘発の可能性、宗教色の強さ、商業主義的傾向など、様々な懸念や心配の声が挙げられたものの、基本的には肯定的意見がほとんどである」としている。また、「具体的には、それらが子どもの夢を象徴的に体現し得ること、想像世界への没入を促進し得ること、経験の多様性を保証し得ること、存在のリアリティを高め得ること、幸福感情や驚異の念を与え得ること、異文化や地域社会との交流機会を提供し得ること」などを挙げている。

#### 行事活動の課題

奥山(1997)は「行事の実施だけで保育時間のほとんどが費やされたり、慣習によってそれまで実施されてきた行事を踏襲してしまうために行事の実施自体が保育の目的になってしまったりするなど行事に関しては課題も多い」と指摘し、また、子どもの成長を促す行事を計画する際の園の配慮として、足立(2014)は、「保育者は子どもの行事を計画する際、人間関係を深める、協調性を養う、知識を育む、などをねらいとすることが多い。し

かし、これだけでは達成感を養うことは難しい。やはり、行事当日に至るまでの過程で得られた成果を“多くの人に披露”する、あるいは“多くの人とともに振り返る”ことが達成感を生み出すと言える。特に集団で何かをやり遂げた経験は、幼児当事者のみならず、周囲の人々にも大きな感動を与えることは多い。子どもはこの達成感を得ることで、自分自身の存在意義や価値観、クラスへの所属意識などを高めていく。その意味においても運動会や発表会を行うことは子どもの成長を促すこと点でも大きな意味を持ち、かつ心に残る行事だと言えるだろう。また、達成感のほかにも異文化性や成長の披露などは、子どもの成長にプラスの要因を与える可能性が高い。なお、行事を行う上で注意すべき事項として、行事の中での“アクシデント”や“ハプニング”、“辛い・怖い”などの体験への配慮があげられる。行事を行う場合は、その過程や行為が“嫌な思い出”として残らないような事前事後の計画を行い、実行・支援していく必要がある」と示唆している。

このように何らかのアクシデントが起こる場合も考えられる。そのような場合も、友だちの励まし(人間関係)などの第1次成長があり、かつ保育者のフォローがある場合は、再度がんばる力が湧き、達成感を得られる可能性は高い。行事は新しい経験を体験できる貴重な機会であるが、うるおいがあり、育ちを促すものでなければならない。保育者はこのことを十分に認識して、行事の計画と配慮を行わなければならない。

秀(2010)は、「多文化教育において、イベントをただ単なる楽しいものではなく、違う文化の持つ歴史的背景やその起源、さらに楽しみを伝える

ためには、①日本にはない新しい行事に取り組み、類似性への気付きを与えること、そして、②実際に海外の子ども達が行う取り組み方を知ること、これらを考慮すべきである」と提唱している。

### 3.2 保育・教育現場における「行事の意義尺度」の作成

**調査対象：**関東圏の保育園・幼稚園・認定こども園に勤務する保育士・幼稚園教諭・保育教諭計113名を調査対象とした。調査内容の完全回答者のみを有効回答者として分析に用いた。有効回答者数は88名(回答者の内77.9%)であった。

**調査期間：**2017年6月～9月に実施した。

**手続き：**質問紙法によって実施した。各園の園長を通して職員にお願いし、後日回収した。

**調査内容：**各項目は保育園・幼稚園・認定こども園それぞれで行っている年中行事に関する活動に対して、回答者がどのように感じているかを「1：まったく当てはまらない」「4：とても当てはまる」からの4件法で回答を求めた。さらに、行事に関する意義について自由回答を求めた。使用した質問項目は以下の通りである。

●読み聞かせ尺度(秋田・無藤, 1996<sup>9)</sup>)から「子どもの知識を増やす」、「行事活動を通して、親子のふれあいを増やす」、「子どもが文化に触れ、空想したり、夢をもてるようにする」など11項目。幼児への働きかけの仕方を確認するためにこれらの項目を用いた。

●きっかけ要因(樽木, 1998<sup>10)</sup>)から「クラスの友達と協力したり、みんなで活動できる」、「自分だけでなく、みんなで活動できる」、「クラスがひとつになることができる」の3項目。この項目で

活動への関わり方を確認した。

●サークル集団尺度(高田, 2015<sup>11)</sup>)から「集団になれることができる」, 「団結が深まる」, 「集団での責任感が身につく」の3項目。この項目で集団内での行動の仕方を確認した。

●保育行事の実態(田中・渡辺, 1989<sup>12)</sup>)から「友だちを祝う心を育てる」, 「両親や先生, 周りの人への感謝の気持ちを育てられない」の2項目。この項目で年中行事への考え方を確認した。

●年中行事(恒岡ら, 2016)から「行事を通して園に通うのが楽しくなる」, 「園が地域や家庭と協力したり, 繋がりを作る機会となる」, 「幼児期の記憶が大人になってから快い記憶として残る」, 「子どもが期待感を持つことが心の成長となる」など9項目。この項目でも年中行事への考え方を確認した。

●サンタクロースは本当にいるのだろうか(阿久津, 2014<sup>13)</sup>)から「夢と想像の世界が膨らむ」, 「幸福感を与え得ることができる」の2項目。この項目でも年中行事への考え方を確認した。

●またこれら以外の追加項目として, 「こいのぼりやひな祭りなど季節行事を知る」, 「自分なりに表現することで新しい遊びが展開される」, 「社会性が身につく」, 「友達を応援する心を育てる」, 「話や行事の由来や伝承されてきた意味を理解する」, 「達成感を味わうことができる」など20項目も加えた。これらは, 幼児への関わり方や, 集団活動での働きかけ方, 年中行事への考え方を補足するために追加した。さらに行事活動に関する自由記述も求めた。

## 4. 結果

### 4.1 保育・教育現場における「行事の意義尺度」の作成

これまでの先行研究をもとに, より詳細な行事活動の意義に関して, その内容を明確にするため用いた50項目による因子分析を行なった。

まず分析については, 複数因子にまたがって因子負荷量が高い項目, 逆に因子負荷量がどの因子についても低い項目は分析の解釈可能性を損なうものとして因子分析から除外した(Table 1)。

その後, 因子の解釈可能性が最も高くなった, 最尤法・オブリン回転での分析を行った(Table 2)。

Table 1 因子分析の除外項目

項目1	子どもが文化に触れ, 空想したり, 夢をもてるようにする
項目2	物事について深く考えるきっかけになる
項目3	子どもの知識を増やす
項目10	こいのぼりやひな祭りなど季節行事を知る
項目12R	子どもが言葉を覚える機会が減る
項目15	行事を通して園に通うのが楽しくなくなる
項目26R	話を聞く力がつかない
項目38R	幸福感を与え得ることができない
項目39	相手の気持ちに共感することができる
項目46	普段とは違うみんなの様子がみられる
項目49	話や行事の由来や伝承されてきた意味を理解する
項目50	家庭では出来ない経験をする事ができる

※Rが付いているものは逆転項目

その結果, 3因子による解釈が妥当と判断し, それぞれ該当項目から, 第1因子を「自己表現力と人間関係力」, 第2因子を「伝統文化」, 第3因子を「集団生活と学び」と命名した。

第1因子「自己表現力と人間関係力」は, 「人への関心を持つことができる」, 「友だちを祝う心を育てる」, 「子どもの様子を保護者に伝える機会になる」など24項目であり, 活動を通して子ども

Table 2 保育・教育現場における行事活動の意義尺度の因子分析結果

		因子負荷量			共通性
		因子1	因子2	因子3	
因子1：自己表現と人間関係力 ( $\alpha=0.950$ )					
項目14	クラスの友達と協力したり、みんなで活動できる	0.795	0.097	0.105	0.554
項目42	達成感を味わうことができる	0.791	-0.039	-0.008	0.637
項目28	保護者が子どもの成長を感じる機会になる	0.773	-0.068	0.120	0.516
項目36	子どもが期待感を持つことが心の成長となる	0.770	-0.104	0.106	0.529
項目43	子どもが世界観を楽しむことができる	0.724	-0.018	-0.075	0.593
項目33	友達を応援する心を育てる	0.695	0.086	-0.184	0.660
項目37	夢と想像の世界が膨らむ	0.670	-0.150	-0.061	0.530
項目17	クラスが一つになることができる	0.661	0.044	-0.170	0.590
項目34	人への関心を持つことができる	0.648	0.160	-0.154	0.570
項目40	季節を感じるができる	0.633	-0.139	-0.003	0.430
項目29	子どもの様子を保護者に伝える機会になる	0.614	-0.182	-0.062	0.467
項目41	子どもが自分の好きなことや物に出会うことのきっかけになる	0.589	0.036	-0.136	0.453
項目47	団結力が深まる	0.587	0.072	-0.273	0.599
項目16	自分一人だけではなく、みんなで活動できる	0.586	0.053	-0.191	0.504
項目25	幼児期の体験が大人になってから快い記憶として残る	0.578	-0.098	-0.146	0.466
項目45R	みんなが一人ひとり頑張れない	0.577	-0.089	0.097	0.291
項目13	行事活動を通して、親子のふれあいをする	0.528	0.055	-0.150	0.389
項目35R	両親や先生、周りの人への感謝の気持ちを育てられない	0.512	-0.019	0.139	0.203
項目32	友だちを祝う心を育てる	0.498	0.154	-0.357	0.585
項目30	高齢の方と交流する機会になる	0.464	0.143	-0.227	0.395
項目31	身の回りの物へ興味を持つことができる	0.446	0.167	-0.356	0.518
項目19	園が地域や家庭と協力したり、繋がりを作る機会となる	0.420	0.055	-0.062	0.210
項目27	自分の意見を話す力がつく	0.409	0.080	-0.323	0.421
項目11	自分なりに表現することで新しい遊びが展開される	0.405	-0.004	-0.272	0.362
因子2：伝統文化 ( $\alpha=0.843$ )					
項目5	古くから伝えられている話を知る	-0.070	0.789	0.228	0.722
項目6	文化について知る	-0.305	0.783	0.041	0.746
因子3：集団生活と学び ( $\alpha=0.915$ )					
項目4	子どもに集中力をつけさせる	0.202	0.109	0.911	0.687
項目7	子どもが言葉を覚える機会が増える	0.132	0.322	0.761	0.611
項目18	集団になれることができる	-0.003	-0.057	0.745	0.555
項目9	子どもが練習成果を示せる	-0.093	0.197	0.688	0.609
項目48	集団での責任感が身につく	-0.172	-0.040	0.637	0.556
項目8	難しいことに挑戦する力がつく	-0.202	0.016	0.616	0.561
項目23	社会性が身につく	-0.163	-0.017	0.614	0.514
項目22	交流の機会の場合になる	-0.163	-0.246	0.582	0.513
項目44	保育をする中で、生活のメリハリがつく	-0.201	-0.045	0.514	0.418
項目24	異年齢の子どもと関わるきっかけになる	-0.304	-0.162	0.501	0.527
項目20	家庭生活と子どもの育ちの関係を見つめ直すきっかけになる	-0.227	-0.041	0.484	0.407
項目21	家庭の中では十分にできにくい行事を園が補完できる	-0.087	0.263	0.416	0.304
		因子間相関	因子1	0.041	0.558
			因子2		-0.056

※項目番号の後ろにRが付いているものは逆転項目



たちの自己表現力やコミュニケーション能力を育むことに寄与していることを示している。

第2因子「伝統文化」は、「古くから知られている話を知る」、「文化について知る」の2項目であり、年中行事はその土地・環境の文化に触れるために必要であると考えていることを示している。

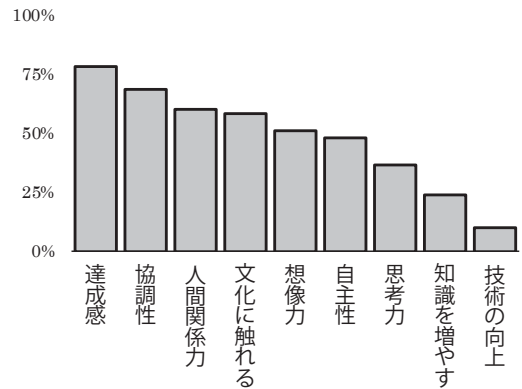
第3因子「集団生活と学び」は、「集団での責任が身につく」、「交流の場になる」など12項目であり、年中行事とは子どもの集団での活動能力を高めるとともに学習意欲を促すことを示している。

#### 4.2 保育・教育者へのアンケート(自由回答)について

「最も力を入れている行事活動名」について自由回答を求めた結果、「全部」が9名、「運動会」37名、「お楽しみ会」13名、「(生活)発表会」10名、「クリスマス」6名、「お泊り会」5名、「卒園式」4名で、その他が8名であった。その他の中には、「親子わらべうた教室」、「日本の伝統文化(節句・節分・七草・十二支など)」、「夏祭り」などの回答が得られた。

そして、何のために行事活動を行うのか、該当すると思われるものすべてを回答してもらった結果、意義として「達成感」を求めていると78.4%が回答した。同様に、「協調性」は68.2%、「人間関係力」は60.2%、「文化に触れる」は58.0%、「想像力」は51.1%、「自主性」は47.7%、「思考力」は36.4%、「知識を増やす」は23.9%、「技術の向上」は10.2%であった(Figure 1)。

Figure 1 行事活動に対して求めている意義



これら自由回答について、複数の項目に回答が得られたことから、保育・教育者において行事活動を保育に取り入れる意義を全般的に感じていることが示された。そして、日常の保育では経験できないことを行事が補っているとして、保育・教育者も行事活動に力を入れていることも明らかとなった。また、達成感や協調性・人間関係力は値が高く、保育・教育者が行事活動の意義として重要視していることから、行事活動では個人の能力の向上よりも、誰かと何かをする経験から得るのが大きいのだと捉えていることが示された。文化に触れる・自主性・想像力に関しては、行事の種類によって差があると考えられる。思考力・知識を増やす・技術の向上においては、保育・教育者にとって行事活動からはあまり意義を得ることができないことが推察された。

#### 5. 考察

作成された尺度を通して、保育・教育者が捉える行事活動の意義について、「自己表現力と人間関係力」、「伝統文化」、「集団生活と学び」の3因子が抽出された。これらの結果から、保育・教育

者は行事に関して、「自己表現と人間関係力が身につく」、「伝統文化に触れることができる」、「集団生活を通して学びを深めることができる」、の3つの観点においてその意義を感じていると考察された。

実際に「自己表現と人間関係力」に関しては、発表する場があることで普段の保育の中で見つけた“自分らしさ”を誰かに見てもらうことでさらに自己表現をすることの楽しさを味わうことができ、自己肯定感の向上への期待が持てる。そして、運動会や劇発表会など一人ではできないことを誰かと協力することでやり遂げる経験から、人と協力することの大切さを学ぶことができると考えられる。また、行事活動を通して普段一緒に遊ばないクラスの友達や大人などと関わる機会となり、人との関係づくりについて学ぶきっかけとなるのではないか。

「伝統文化」については、日本における節句や節分、七夕などがあり、子どもたちは文化にまつわる話や昔の人の願いなどを知ることを通して知識を増やしたり、登場人物の思いについて想像し考えることができる。また、宗教行事や外国の文化に触れる経験として、花まつり・ハローウィーン・クリスマスなどでは、祈りを捧げたり、サンタクロースに感謝の手紙を書いたりすることを通して、相手を思いやる気持ちや想像力を育むことが期待できるのではないか。

「集団生活と学び」においては、普段の保育での集団生活力を生かしながら、お泊り保育などの特別な行事を通して、特別な意識とともに、協調性や人との関わり方、思いやりなど多様な学びにつながっていくのではないかと考察される。

これらのことから、行事活動の意義はその内容や場面によって異なり、日常の保育では培えないことの補完をしていると言えるだろう。そして、行事活動を保育に取り入れることにより、子どもの成長をより豊かなものへと変えていくことができる可能性や意義を保育・教育者は捉えていることが考察された。

## 6. 今後の課題

本研究では、行事活動の意義について考察したが、さらに数多くある行事活動について、その行事活動がもたらす影響や、保育に取り入れられる意義について検討することが今後の課題である。また今後は、本尺度の信頼性・妥当性を検討し、より実践的なものにしていくことが課題である。

## 要約

本研究は、保育・教育現場における行事活動の意義を考察するために「行事活動の意義尺度」を作成した。その結果、3因子が抽出された。第1因子は「自己表現力と人間関係力」、第2因子は「伝統文化」、第3因子は「集団生活と学び」と命名された。

## 引用文献

- 1) 奥山順子 (1997) 幼稚園と家庭との連携—園行事の実施と幼稚園教育の役割— 秋田大学教育文化学部教育工学研究報告 19 113-124.
- 2) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領

- 4) 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針
- 5) 秀真一郎 (2010) 幼児教育における年中行事から見る多文化教育 吉備国際大学研究紀要 (社会福祉学部) 20 109-118.
- 6) 恒岡宗司・中田章子・西田外美江 (2016) 幼児期の年中行事体験を生かした保育の在り方について—学生の年中行事体験に関する実態調査を通して— 奈良学園大学紀要 47 (4) 49-70.
- 7) 足立里美 (2014) 行事による子どもの成長の検討—学生の幼児期の行事に対する考えと振り返りから— 岐阜聖徳学園大学紀要 (教育学部編) 53 91-103.
- 8) 富田昌平 (2015) サンタクロースとクリスマス行事に対する大人の態度と支援 三重大学教育学部研究紀要 (自然科学・人文科学・社会科学・教育科学) 66 265-272.
- 9) 秋田喜代美・無藤隆 (1996) 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討 教育心理学研究 44 (1) 109-120.
- 10) 樽木靖夫 (1998) 中学生の文化祭活動に関する研究 (4)—活動に関する自己評価の変容、自我関与、印象性、きっかけ要因の関連及び協力レベルの検討— 日本教育心理学会総会発表論文集 40 (0) 219.
- 11) 高田治樹 (2015) サークル集団における行事活動の心理的成果を測定する尺度作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集 57 (0) 675.
- 12) 田中敏明・渡辺尚子 (1989) 保育行所の実態と評価—誕生会を中心に— 日本保育学会大会研究論文集 42 322-323.
- 13) 阿久津愛 (2013) サンタクロースは本当にいるのだろうか—目に見えないものをどう伝えるか— 関東学院大学卒業研究要旨集 1